

＜鏡のエチカ エチカの鏡＞



* 三島由紀夫が石原慎太郎と対談した時に
日本を守るものは三種の神器だと三島が言ったら
思想のほんとうの出自が、なにやら”不明”な石原は、意味がわからず腰を抜かしていた。

＜日本を守るとは、三種の神器である＞
＜日本とは、 八咫の鏡の秘儀である＞
＜日本とは、 空っぽを本質とする＞

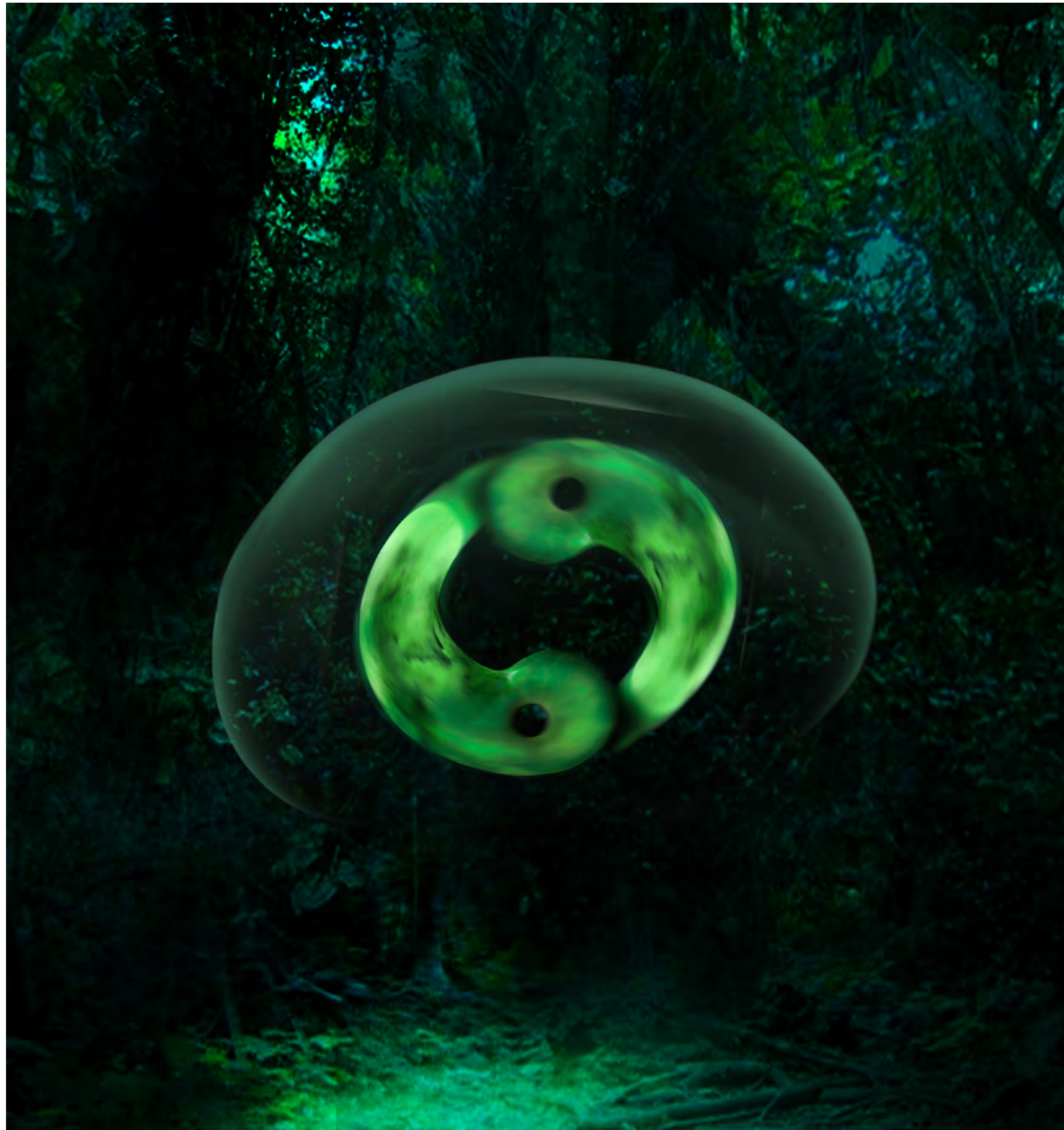
みもろの三輪の禁忌の神域には
古代の白檜の森があり、
神聖で神的で いつき（厳き）白檜の森に
そこだけぽっかりと空いた なにもない空間が立っている。
一本の白檜がありそこにオリハルコンの八咫の鏡が
吊るされている。
その前には、安倍晴明神社の湯気の神事に出る巫女のような
装束のものが少し透き通って
樹の下で、祀りをおこなっている。
ゆらゆら ふるべ と聞こえる。それとともにその双対の鏡の
空間がゆらゆら摂動を始め謳いだす。

（白檜原kabaraの空っぽの空間で、あの巫女はまだゆゆしき神事として ゆらゆら ふるべ と唱えているのが聴こえる）
モーゼの石板のように双対の八咫の鏡の空間。
その空間に叢雲劔の柱が垂直に天上を目指して太しき立つ。
光のリフレクションが、二匹の蛇のように巻きつき激しく螺旋に往還しはじめ、
それによって励起されたタマは、回転を始め、生命となる。
背後にうっすら生命の樹が現れ始め、
キリスト意識の胎内の位置に”ティファレット”が中枢に輝き出す。

日であり日神であるアマテラスの鏡。
その位置のティファレットは、日神であり太陽であり、美である。
そこからは美としてのキリストが生成してくる。
その位置に回転する勾玉がある。

ヘーゲルの言う「無の中で無が運動する」神聖装置だ。
「無の中で無が運動する」とは芸術の真髄だ。
この神聖＜御嶽空間＞の空無の中において
作動する古代の生成装置＜八咫の鏡＞は、
美を産出することを目指してやまない。
それが日本であり、日本人の使命のような、文化意志__＜みやび＞。
またそれは鳥居のように＜門＞＝境界そのものとしてあり
純粹持続空間に誘う。
門の前には、やはり双対の鏡と同じく、双対のスフィンクスがいるのだろう。
空っぽの御嶽・磐座空間にある古代装置＜八咫の鏡＞。
＜自由=優雅＞による、なにものかへの闘い。

< 語りえぬ共同体 >

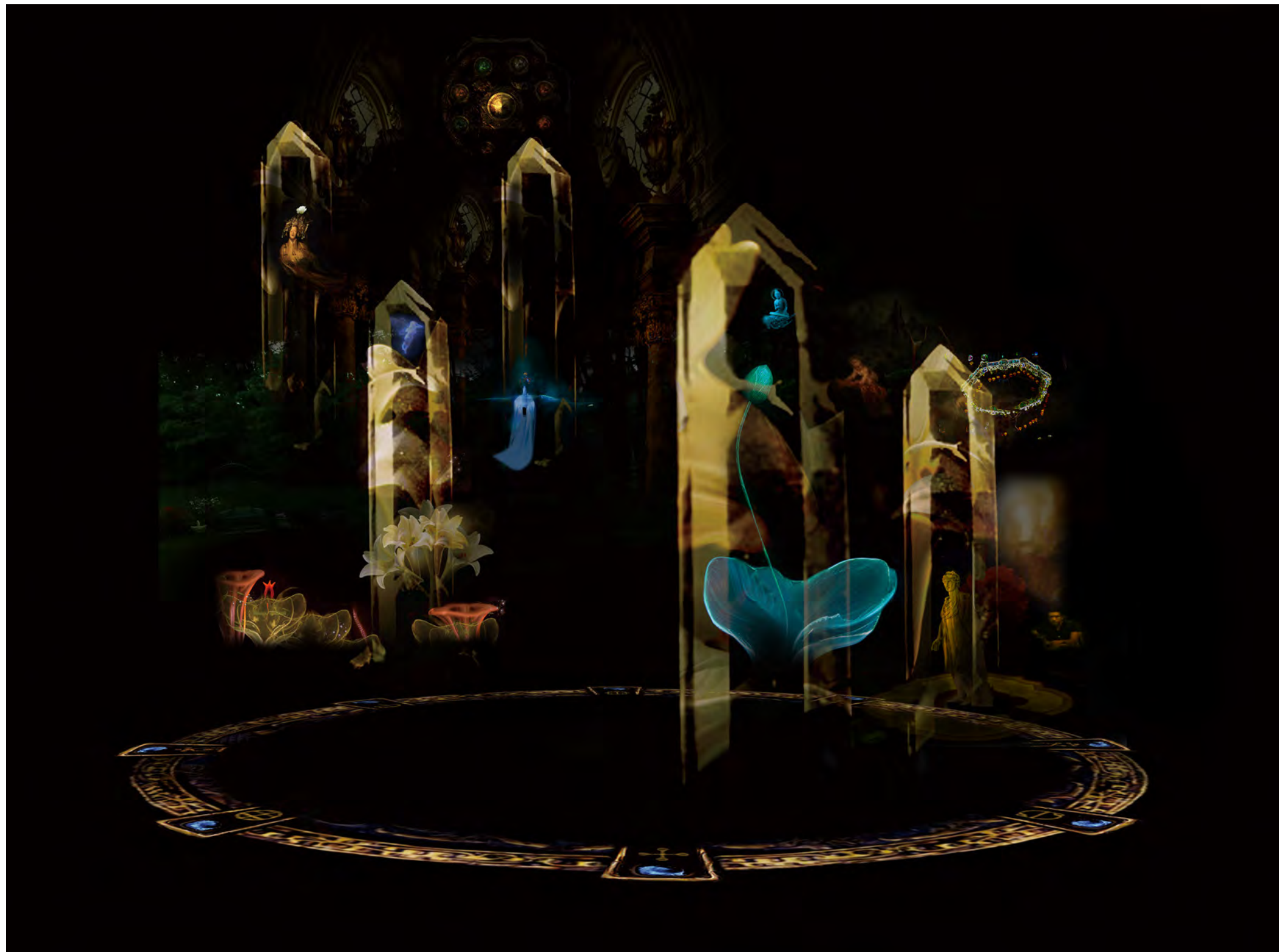


「高次元から見ると、
他者は外部にいるのではなく自己の内部にいる。
内部に他者を見出して、
そこに共同体を作らない限り、
まともな社会はやってこないと思う。
この空中戦はその意味では、
社会全体を内化させるための戦いでもある。
<語りえぬ共同体>は存在してるんだよ。」

半田 広宣 Twitter

真理の庭。

非局所は、虚軸に舞い降りる _____ 半田広宣 @twitter



保江邦夫博士は、講義のためドイツに向かうアウトバーンを
180km以上で飛ばしている時に、突然
すべての音が消え、無音のゾーンに入り、
ひたいの裏に、一つの数式が投影された。
ドイツの小さなホテル[バインハイム]にチェックインし
その数式を紙に書いてみると、
ハイゼンベルクを超える”あの世”の方程式だった。
翌日、ホテルを出るときに近くにある ある庭に
案内された。それは”真理の庭”に似ていた。

岡潔もパウリも南方熊楠も宮澤賢治も、
自由に＜高天原＞に行き来でき、
そこで真理の果実を少女のような精霊から、与えられた。
そこでの真理たちや万象は、みんな摂動し浮遊している。
生きている波動関数と言ってもいいし、
揺らいで振動する音韻・言葉でもあり歌でもある。
非局所は謳っている。
非局所の愉楽のため、先祖や、未来の私たちも
みんな揺らいですぐ隣にいる。
私？ _____そこは ^{durée pure} ”あなたしかいない”非局所の愉楽。

＜宇宙紀の花の内部構造＞

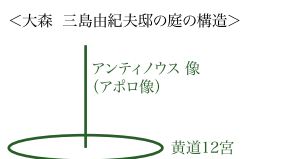
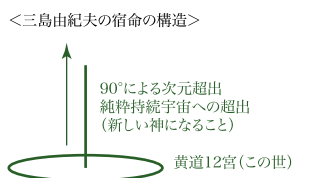
「自由と優雅といふ立体構造」——三島 由紀夫



＜自由＞

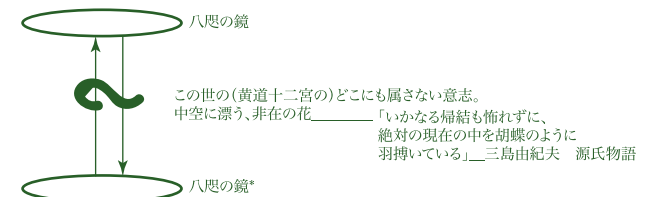
ここで三島由紀夫の言う”自由”とは
？億年前からの宇宙での彼の魂の記憶による闘い、
プロメテウスの火の自由へ、ということだろう。
A.ランボーのひそみにならって言うならば、
「俺は下方に女たちの地獄を視た」——その取り巻く黄道12宮という
この世の「惑星Matrix」を超えて、
存在の「正午」に（市ヶ谷12:20）垂直90°に超出するファロスの次元転移の意志、
それを彼は、大森の邸宅の庭に設えられた黄道12宮に取り巻かれた
アンティノウス 像に託した。
なので、私は左の画像の生命の樹の真ん中、
つまり美と太陽の位置にアポロ（アンティノウス）の画像を配してみた。
三島由紀夫は、毎日 じぶんの宇宙的な宿命の過去と未来の構図を
自己批評として庭に置いてずっと看ていたのだ。
こんな明晰なニンゲンがいるだろうか。

評論家たちは他人が考えた小説の「筋書き」の、だれも頼んでもいないのに自前の「解釈」などを言挙げしている。



＜優雅＞

また、ここで三島由紀夫の言う”優雅”とは、
これまた自由と同じ位相の”文化意志”の表現だ。
古今和歌や源氏物語の”優雅”——プレシオジテ。
”優雅”とは、意志。宇宙意志。

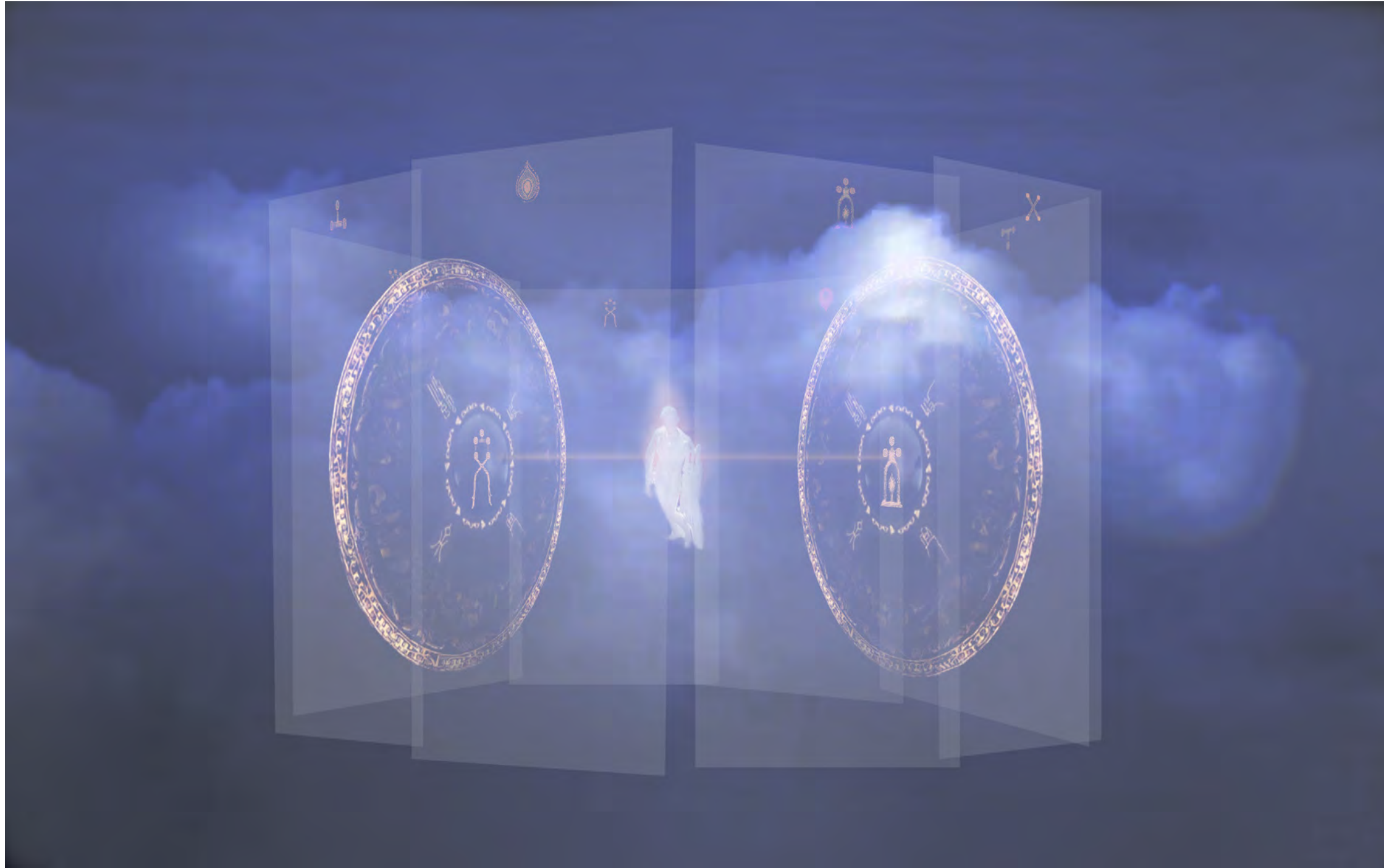


そしてそれが「立体構造」と言及するのは何の謂いか。
多次元”八重垣システム”の位相立体 “空間錯合体”か。

永遠
L' Eternité.

求めて行くのはプロメテウスの自由へ。

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣を



ヤークモ ヤー
雲は、神の出現の兆し。

今、その雲が立った。

日本人を神人に進化させる装置__

＜八重垣システム＞を

この日本の列島龍体の上に

私は確かに構築しえた。

人神を目指す志を忘れない少数の日本人よ（神の花嫁よ *註1）

櫛稲田比賣よ、

この＜八重垣システム＞を。 *koike*

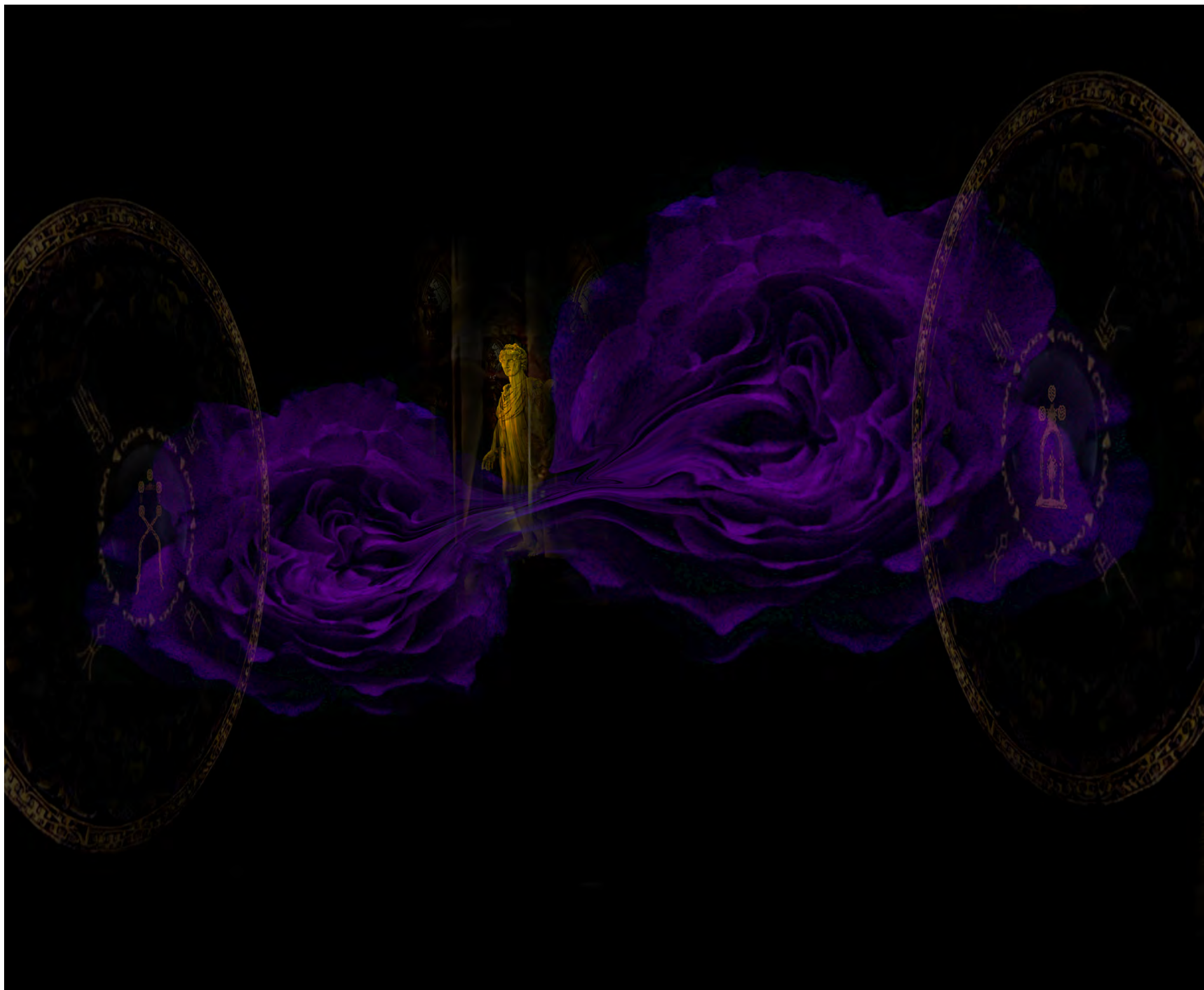
（*註1）....[神の花嫁]という解釈は、“KAZUのブログ”より

半田広宣 __[鏡を割って、鏡を開く] 2014 /10.28 web-log

『羸都鏡（おきつかがみ）/ 十種神寶圖形譚に曰く.....（中略）鏡形から脱す者也。亦、物部氏十種瑞寶秘傳に曰く、白銅圓鏡也、或説銀鏡、月象之鏡、在人者陰、水気鏡、御氣都神所掌也。……自己の視野のこと。「鏡形から脱す者也」の部分、要注意。
オキツカガミ（外宮神体）とヘツカガミ（内宮神体）。一言でいえば、**他者の視野空間と自己の視野空間の関係のこと**を言っている。今の人間は他者の視野空間に支配されていて自分の視野空間が開いていない。つまり、外宮のみに世界を見て、肝心の内宮神体が沈んでいる。
僕がいつも「真の奥行きを取り戻せ」と言っているのは、このヘツカガミをきちんと立てるためなんだけど、ヘツカガミが立つと、内宮の風景が見え始め、写し合う二枚の鏡の関係によって、神話で**ヤタノカガミや八重垣で象徴されている四組双対の空間階層が見えてくる**。
その第三階層と第四階層にあるのが、生玉（イクタマ）と死返玉（マカルガエシノタマ）、足玉（タルタマ）と道返玉（ミチガエシノタマ）だ。それぞれ互いに反転関係にある。OCOT情報が順に「位置の等化」「位置の中和」「位置の変換」「位置の転換」と呼ぶ空間概念に対応している。。外宮で遊ぶ鏡形から脱し、内宮から外宮へと至る逆の道を開くこと。そこに他者との真の出会いの秘密（火水）の場所がある。』

「鏡形から脱す者也」

三島由紀夫は、
日本人はひとりひとりが
ニーチェにならなければいけないと言った。



君は古代の^{あいたい}雲の雲

三島由紀夫 — 蓮田善明への弔辞より



美を求めるころのとき、強度(通路)が現れる __koike



強度の場が現れると、主体は襞に巻き込まれ、
純粹持続の中にいる。

じぶんは外だと言う＜反転＞が起こる。

美は、だから倫理的なものに似ている __koike

「メルロ＝ポンティがこのように〈奥行き＝深さ〉のなかに主体の可能性を根付かせようとした理由がどこにあったのかと言えば、それはフッサール現象学のような対自の哲学、つまり「意識はつねになにものかについての意識である」とあからさまに言明するような表象の哲学、意識の哲学からの脱却を意図してのことである。

ドゥルーズもまた『ベルクソンの哲学』を著した時点ですでに

「空間そのものが物のなかに基礎づけられ、物と持続との関係のなかに基礎づけられ、空間もまた絶対に帰属し、その《純粹性》をもたなくてはならない」(11)と考え、主体の同一性を保持する現象学のような哲学の乗り越えを諮っている。

奥行きがひとたび〈深さ〉として純粹持続との結合を果たせば、

ドゥルーズの思考の文脈から言えば、それは

「感性作用を引き起こし、感性自身の限界を定めている」強度の場の出現ということになり、もはや外延量ではなく即自としての内包量へと変質する。」

半田 広宣____持続から襞へ—ドゥルーズの空間論の行方

存在は ただ美的現象としてのみ意味を持つ_____ニーチェ

「鏡形から脱す者也」

メルロ＝ポンティは
一生涯にわたってこの「深さ」としての奥行きのなかに
実存を見る思考を継続しつづけ、その晩年に
「見る者」である主体もまた奥行きの中に含まれているという
結論にたどり着いた。 __半田広宣 web-log

海は、わたしを視る眼であるが、
実は海はわたしであるがゆえに、
視るものが見られている混融がある。
わたしは新しい神になる。

「鏡形から脱す者ナリ」

ブランショの「謎のトマ」も

(Toma L'bscure)
篠沢秀夫・訳

三島由紀夫の「花ざかりの森」も

「豊饒の海」も

この海の黙示的な文書だ。

畏敬すべき碩学篠沢秀夫は、たぶん世界でただ一人、モーリス・ブランショの
「謎のトマ」の初版Versionにあれだけこだわり、（もう一人訳出された方はいるが）
進行性麻痺の重篤な病床にあってあの難解な「謎のトマ」を訳し終えて亡くなった。
わたしは、会えずに残念だった。
世界で「謎のトマ」の今の意味を思う人は、あんまりいないのでは無いか？
篠沢さんも生涯かけたけど、ブランショは、わかったとは言えないと言っていた。
この世にいる間に「宇宙紀の花__三島由紀夫」を
お見せしたかった。篠沢さんの中でブランショと三島由紀夫は、
実は、何か宿命的でそれが何かわからないけど、
どうしても惹かれる抽象的な呼び声があったのでは？
なんとかれは初代の三島由紀夫「憂国忌」の発起人だった。
引用した半田広宣さんのメルロオ・ポンティへの言及も衝撃的だった。
「見る者」である主体もまた奥行きの中に含まれている
篠沢さんもコレージュ・ド・フランスでメルロオ・ポンティの講義を聴いたが
難しくてわからなかった、と。
小林秀雄が晩年、メルロオ・ポンティとジル・ドゥルーズを原書で眼を通していたと言う
記録があり、小林秀雄は「なかなかいい」とか言っていたとか。koike



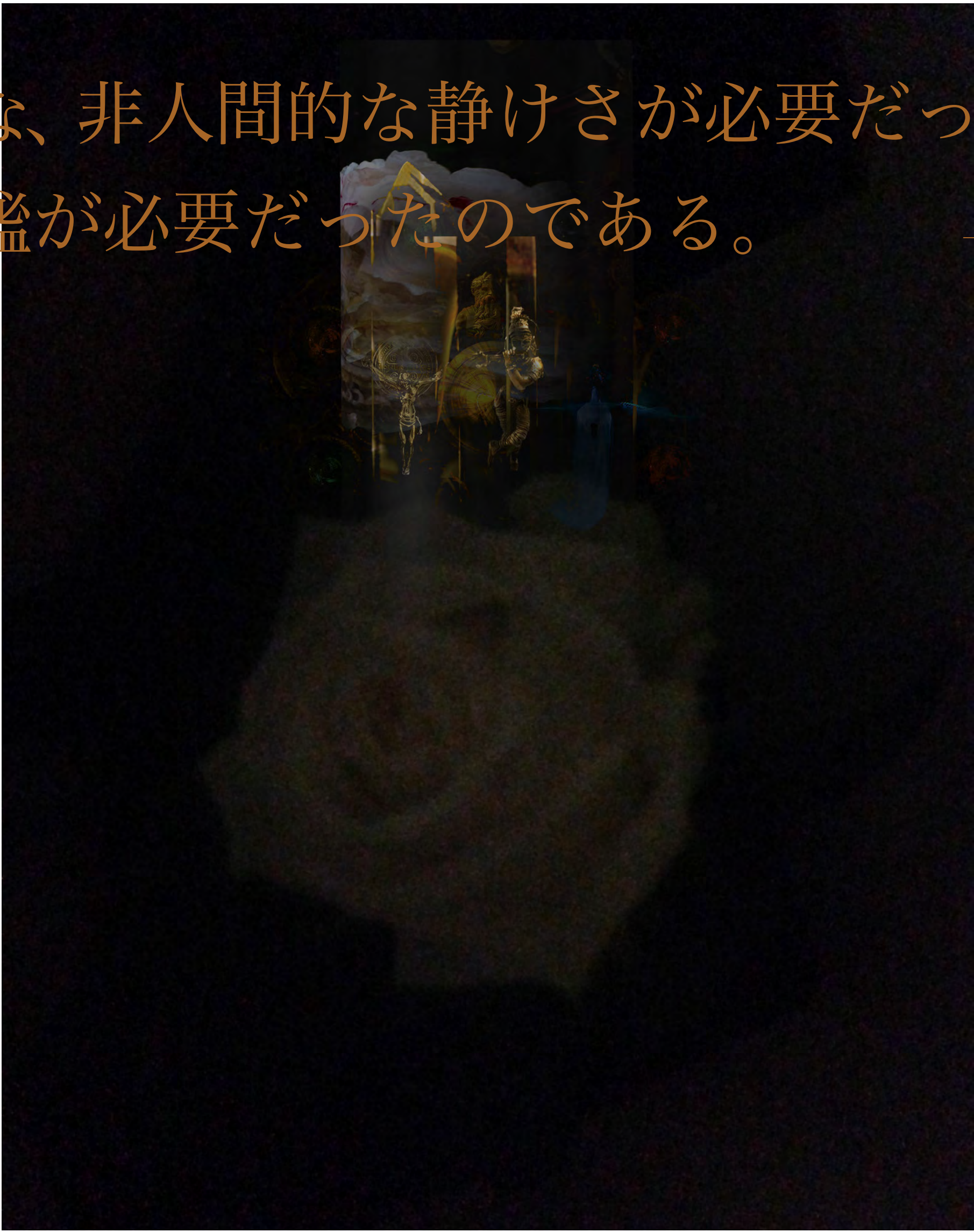
神の庭__“真昼の静謐”

ある異常な、非人間的な静けさが必要だったのである。

どんな奇跡もそこでは意外でないような、

真昼の静謐が必要だったのである。

__三島由紀夫 「相聞歌の源流」__



「横尾君、宇宙は＜礼節＞で できているのだよ」^{*} _____ 三島由紀夫

^{*}市ヶ谷自決から数年後に、三島由紀夫の意識体は、横尾忠則にこう連絡してきたという



強度の場が現れると、美への希求が現れると、
主体は反転し、純粹持続宇宙に巻き込まれる。
純粹持続は、たぶん美でできている、
美への志向で、生きている生命。
その反転後にはかつての＜わたし＞はいない。
＜外＞の全てが＜あなた＞の貌をしてる宇宙。
これは倫理の終わりのエチカ。
この液体のように流動し、素領域の中を靄のように意識を
明滅・遷移させながらフィールドとして
広がりを生きている水晶共同生命体は、
古今集の言葉のように、＜公＞の王土としてある。
内部は、＜公＞の意識同士で息づいて、交換明滅している。
だから、宇宙は”美しい”＜礼節＞でできている。____koike

Jocho 「宇宙は情緒でできている」岡潔

Jocho is not emotion in English but something else that cannot be translated into English.

However, approximately it is almost closest meaning of Love. Oka Kiyoshi



「宇宙は情緒でできている」

情緒Jochoは愛。

「素領域」[*1] は 水。[*2]

宇宙（デュレ・純粹持続）は、＜礼節＞の花でできている。

湿潤は 花の基体。湿潤は日本のカミの基体。[*3]

情緒Jochoは花の基体。

だから情緒と花は神と言ってもいい。

日本、日本人は みやび。[*4]

あはれを基体として生きていた。

かつては。

つまり、とても遠い時に、

＜デュレの宇宙＞を忘れて見えなくなってしまった。

____koike

[*1] ____形而上学的素領域理論（保江邦夫博士）

[*2] ____「宇宙は霊と水でできている」（知花敏彦）
だから宇宙全体は、天之[水]中主の遍満である。

[*3] ____粘菌＝宇宙神、神社の森の湿潤に宿る。（南方熊楠） ギザピラミッド王の間も湿潤の赤色花崗岩でできている。（保江邦夫）

[*4] ____日本とは「みやびを中心とした衛星的な美的原理、幽玄 花 わび さび」などを成立せしめたが、この独創の極みこそ、天皇であった」（三島由紀夫）
現在、火星で地球日本の前方後円墳の１００倍ほどの規模のスメラギの前方後円墳遺跡が発見されている。スメラギの起源はさらに宇宙紀的に深い。

Departure & Arrival



宇宙紀を満たす、＜花＞の核には、ひとつひとつに[生命の樹]のデバイスが格納されているかもしれない。

宇宙に瀰漫する素領域の一部屋一部屋が花であるように。水の中の花。天之[水]中主。

宇宙は華嚴。遍満する”雑の華”はひとつひとつが素領域。 事事無礙で、概念も肉も鳥も、透き通って区別の無い＜襞＞となり、たゆとうている。

その「言葉の」部屋の花は、毘盧舎那の影の無い原光が、お互いを映しあって、和歌のような言葉で通信しあっている。

音楽。生命の樹も八段階でオクターヴを昇る音階の樹、その生命の樹から音楽が流れてくる。

非在の鳥になること。非局所の舞い降りる鳥になること。霊。新しい神になること。何もののにも束縛されない自由。_koike

「艶なる宴に充ち、快樂は空中に漂って、いかなる帰結も怖れずに、絶対の現在の中を胡蝶のように羽搏いている。^[1]」

^[1].....三島由紀夫_源氏物語の項より「日本文学小史」

^{Pli}＜襞＞と＜純粹持続^{durée pure}＞が息づく場所

「なぜ＜深さ＝奥行き＞が幅と異質なのかと言えば、奥行きには必然的に時間の経過が内在させられており、それはもっとも遠い過去を、現在と共存している過去として証示する」

「つまり、奥行きの中には＜生ける現在＞を構成するための時間の縮約＝過去全体が息づいていると考えられるのである。」

「このような奥行きはもはや延長でもないし、現れては次々と消えていく継起的な時間でもないことがすぐに了解されるだろう。それはまさに現在と過去の同時性を達成している純粹持続が息づく場所のようなものへと変貌している。」

半田広宣__

思い出と、繰り返し還ってくる未来。__koike
13番目の女が還ってくる__ Gérard de Nerval

Le Pli
et
durée pure

miya bi

花

durée

と 海

ベルグソンの達成を基礎に、ドゥルーズは、[持続]と[褻]を言い、
「超人間的なものにわれわれを開くこと、人間的条件を超越すること」[註]を、
エチカとして、提唱し、ニンゲンの形式の変革を志した。

[註] (半田広宣「持続と褻の空間論の行方」)

フーコーは、「人間という形式は賭けてもいいが、消える」、という言い方で
この世の＜言葉と物＞が未来の形式へ移行されるべきだと言った。
それは無数の無名の声が響かせる、未だ語りえぬ共同体の声へ、と。

フーコーは「21世紀はドゥルーズの時代になるだろう」と言って死んだ。

半田広宣の所業は、
ドゥルーズの西欧地方特有の混沌のフランス文体哲学を、
シリウス（OCOT）からの教導・支援により、誰もが、自分なりにその理論から
オリジナルな創造に歩んで行ける、客観的な対象性を持つ現代神聖幾何学
に析出しつつあることだと思う。

三島由紀夫は、来るべき書物、来るべき宇宙、は
みやび・花が、エチカの つまりは
変革されるべきニンゲンの闘争原理であると志気を唱えた。
これは西欧や人類が、この太陽系で誰も提出したことのない異形の文化意志。形式への意志。

紫式部は、もう＜ニンゲンのいない世界＞を1000年前に書いた。

古今・紀貫之の歌の形式や、藤原定家の形式への意志は、
言葉が公理であるような、存在しないエチカの美だけで成り立つ王土の世界を、
存在と言葉がすべてロココ化して成り立っている王土の世界を、
あらまほしき純粋持続（海）として志気を唱えた。

三島由紀夫は
いわば和歌原理主義を宇宙原理とし、未だ視えない純粋持続（海）への
志と指示向線を提出した。日本人が少数であっても超人となるべく。
わたしが「宇宙紀の花」を書く理由は上記のことによる。

海の向かふで美が哭いている たぶん 水平線の少し向かふで____豊饒の海 終章



Le Pli
et
durée pure

非人称の花



非在の花は非在であるがゆえに世界のみやび化を可能にする__koike

Jocho
宇宙紀の花は、湿潤の感情

「外空間の感情」

私の立場は、今まで見て来たように
シンプルな原則で成り立っている。
三島由紀夫の遺した、ギリシャ・ゼウスの宮居のような廃墟に散らばった、
美しい言葉の形而上学的断片の暗号による未来計画書を、拾い集め復元し、
想像の補助線で延長して来た。

- ・宇宙紀が目指すものは、＜美＞。
- ・ニンゲンの形式は終わる。
- ・＜みやび＞＜もののあはれ＞が、＜外＞の、瀾漫する意識存在になり、
- ・心ある人間は、惑星間に広がる、和歌言語の霞のような意識フィールドの
共同生命体に やがて進化を目指すだろう。 明かしえぬ共同体。
- ・それは＜美＞と＜礼節＞の ”みやび生命体”。^[註1]
- ・加えて言えば、詳しくは控えるが、
実は＜美＞は ある戦闘のエチカでもある。

そんな志向を持続してきた私は、今、驚くべき言葉に遭遇した。
＜外空間の感情＞_____半田広宣。

フーコーが少しじぶんの発言が怖く なって控えた後、^[註2] 亡くなり、
ドゥルーズが＜襞＞までたどり着いた後、襞の中で「行方不明」になった
西欧という“地方思想”の涯に、
シリウス意識と日本心性でしか なしえない越境が ^{タカヒマラへの} 今ようやく 開始される。
_____koike

「こうした内なる思考が生まれてくると
おそらく感情は外にあるもののように感じてくるのではないか？
それは新しい時代の「もののあはれ」と言っていのような
空間感情だろう_____。
内空間の思考と、外空間の感情。
今まで夢想だにしなかったような人間の形式。
世界はいずれそうなってゆくような気がする。」

半田広宣 _____2019 10.24 twitterより



[註1] “みやび”という概念と言葉は、古代の地球に現れた プレアデスの神々「キマ」の”絢爛”な都市型宇宙船をあらわしているという
驚嘆すべき指摘がある。惑星間に広がる意識フィールドを”みやび”というエチカに捉える私には、とても暗示的だ。
そしてUFOとは、ほんらいは非局所的な態様。ある意味、意識フィールドと言えるし、ゲートでもある。
『雅（みやび）と御輿（みこし）キマの宇宙船を示したもう一つの表現、
「甲高く叫ばせる物」のヘブライ名は「メイェブ」ですが、母音を「i a i」と充てて「ミヤビ」とし、
「雅（みやび）」「遊士（みやび）」の漢字を充てたと考えられます。キマの宇宙船が非常に優美で、
雅やかであることから、その字を充てたのではないのでしょうか。』
_____西澤徹彦： web page より（ 日本古代歌謡・和歌のヘブライ語による解説と、万葉・古今の中のプレアデス・UFOなどの隠された表現について）

[註2] 吉本隆明の「書物の解体学」：フーコーの項での発言を参照のこと、「言葉と物」の結語への怖れ？

“非在の鳥”の美学

“非在の言葉”の美学

神の創造と、[ニンゲン]の創造のちがいは、
不死の神は死すべき生物を創るときに、
その鳥の美しい歌声が、鳥の肉体の死と共に
終わることを以って足れりとしたが、
芸術家がもし同じ歌声を創る時は、
その歌声が鳥の死の後まで残るために、
鳥の死すべき肉体を作らずに、
見えざる不死の鳥を創ろうと考えたにちがいない。
それが音楽であり、音楽の美は形象の死に始まっている。

——三島由紀夫[アポロの杯]

何か究極の形のなかの美を思いえがくときに、
えがかれた美の完全性は、破滅に対処した完全さ、
破壊に対抗するために破壊の完全さを模したような
完全さである場合がある。
そこではぞ創造はほとんど形を失う。

——三島由紀夫[アポロの杯]



芸術家が創る作品は、作品の言葉は、
あらかじめ死すべき肉体を奪われた非在である。
ゆえに美は廃墟（非在）からたち現れ、廃墟に似てくる。
非在であることが、死が希望であるように、
無際限の可能性を帯びるのだ。

この白熱した、領域を奪われた”白”は、
（プロメテウスが神から盗んだ火のように）
何ににも頼らない、それ自身で存立する”自由”を、
つまり 内なる夜の夜、内なる神の正午を 生き始めるのだ。
モーリス・ブランショの、中性の、白の、死の、言語論と、
三島由紀夫の非在の和歌原理主義とが、
中枢の中枢で白熱し呼応するのがこの時だ。

しかし、ブランショの西欧という悲劇は
（セザンヌも同じなのだが）
この西欧の非在の庭には、
＜花＞が存在しないのだ。幽霊。

だから、私は[宇宙紀の花・三島由紀夫]を書く

——小池憲治

「日本とは、日本を守るとは何だ？」

それは八咫鏡の秘儀だ」

三島由紀夫 文化防衛論よりkoike抽象改ざん

この双対の鏡は

見下ろす神の眼であり、下の鏡はニンゲンの地上性か。それが合わせ鏡になっていることは、

「見るものが、同時に見返されるもの」 〓 高次の止揚された存在が、来るべき存在が、宙空に鏡像反転し浮かぶ、ということ。

また、これを別の言い方に変えると「鎮魂と、表現が一つのものであることは、神祕な力の残照と、人間的な表出とが一つであることを暗示する」三島由紀夫「日本文学小史」

*この鏡像反転の位相空間に幻出する花とは？ それは、

古今和歌集のような「規範だけになった言語 〓 非在の美」だけがプロメテウスのように神に叛逆し、この世ならぬ非現実の存在を産む。

絶対の「自由」。大いなる正午。それはだからゾロアスターであり、ニーチェであり、バタイユであり、ブランショであり、

何よりも藤原定家と日本王朝女流文学なのだ。



*伊勢神宮にあるという八咫の鏡_koike Digitalで創作 *宙空に浮かぶのはイエスキリスト聖骸布より